



本会公式YouTubeチャンネル

@JspbOfficial

本会公式X (Twitter)

# 日本植物バイオテクノロジー学会 会報

## Plant Biotechnology Vol.40 No.4 発行のご案内

1

### Reviews

#### [2022年度奨励賞受賞・招待論文]

#### [Precise genetic engineering with piggyBac transposon in plants](#)

Ayako Nishizawa-Yokoi, Seiichi Toki.....255

piggyBacトランスポゾン(Transposon)は昆虫由来のDNAトランスポゾンであり、「フットプリントを残さず転移する」という遺伝子工学上優れた特性を持つ。そのため、様々な生物種において遺伝子工学的手法に用いられてきた。本稿では、筆者らが確立してきた植物におけるpiggyBacトランスポゾンを利用した精密ゲノム編集技術を紹介するとともに、将来展望について考察する。

### Original Papers

#### [A multiple shoot induction system for peptide-mediated gene delivery into plastids in Arabidopsis thaliana, Nicotiana benthamiana, and Fragaria X ananassa](#)

Masaki Odahara, Most Tanziman Ara, Remi Nakagawa, Yoko Horii, Shougo Ishio, Shinjiro Ogita, Keiji Numata.....263

我々はシロイヌナズナ、ベンサミアナタバコ、イチゴにおける液体培養下での多芽体誘導条件を見出した。誘導した多芽体を用いてペプチドを担体とした色素体への遺伝子送達を検証した結果、外来遺伝子の色素体ゲノムへの組み込みと発現を確認することができた。これらの多芽体はin plantaの色素体形質転換やゲノム編集において有用であると考えられる。

#### [Transcriptome analysis of tomato plants following salicylic acid-induced immunity against Clavibacter michiganensis ssp. michiganensis](#)

Naoki Yokotani, Yoshinori Hasegawa, Yusuke Kouzai, Hideki Hirakawa, Sachiko Isobe.....273

トマトのサリチル酸処理した葉とかいよう病菌を接種した葉のトランスクリプトームを比較することで免疫に関する遺伝子の探索を試みた。その結果、受容体様キナーゼ、EF-handタンパク質およびWRKY型転写因子が免疫シグナルに重要な役割を果たしている可能性が示唆された。

#### [Gene-flow investigation between garden and wild roses planted in close distance](#)

Yuna Asagoshi, Eri Hitomi, Noriko Nakamura, Seiji Takeda.....283

バラは主要な花き植物であり、交配育種や遺伝子組換えによって多くの品種が作出されている。これらの栽培時に懸念されるのが、野生種との交配による遺伝子流出である。本研究では、葉やDNAのバルク化や胚からのDNAと、DNAマーカーによる効率的な交配検出手法を確立した。

#### [Structural features of T-DNA that induce transcriptional gene silencing during agroinfiltration](#)

Emi Iida, Kazunori Kuriyama, Midori Tabara, Atsushi Takeda, Nobuhiro Suzuki, Hiromitsu Moriyama, Toshiyuki Fukuhara.....289

GFP遺伝子を発現するベンサミアナタバコにGFP遺伝子をT-DNAに保有するアグロバクテリウムを葉に浸潤させると転写後遺伝子サイレンシング (PTGS) が誘導される。本研究では、空ベクターを保有するアグロバクテリウムを浸潤させると、GFP遺伝子に対する転写後遺伝子サイレンシング (TGS) が誘導されることを示し、TGSが誘導されるT-DNAの構造的な特徴を明らかにした。

### 目次

Plant Biotechnology Vol.40 No.4	
発行のご案内	1
第5回産学協力セミナー開催報告	3
学生優秀発表賞に関するアンケート結果について	4
学会賞受賞者インタビュー	6
「2024年度JSPB国際会議参加奨励金」の応募について	8
学会からのお知らせ	8
特別賛助会員のご紹介	9

### 今号のトップ写真

Plant Biotechnology誌最新号の表紙写真から、イネ胚乳細胞壁におけるグルコマンナン(β-D-Glucan)の品種依存的蓄積を示す免疫電子顕微鏡写真。本文は[こちら](#)。

学会ホームページの[会報一覧](#)から会報をダウンロードするためのパスワード「jspbk2023」



Variety-dependent accumulation of glucomannan in the endosperm cell walls of rice grains

Plant cell wall plays important roles in the regulation of plant growth/development and affects the quality of plant-derived foods. Genetic variability of cell wall components within a plant species, however, has not been well understood. In this issue, Zamorski et al. showed that the endosperm cell walls from 89 rice varieties were clearly classified into two groups, depending on the presence/absence of  $\beta$ -1,4-linked glucomannan (See [Zamorski et al., pp. 321–336](#)).

Immunoelectron microscopic observation of developing rice grains with an anti-Man4 antibody often detected the accumulation of glucomannan (indicated by the presence of gold particles) in the middle portion of the thick aleurone cell walls of a glucomannan-positive variety, Fujisaka-5, suggesting that the glucomannan was synthesized in the early stage of endosperm development but the synthesis was downregulated during the secondary thickening process associated with the differentiation of aleurone layer.

#### [Salt tolerance and regulation of Na<sup>+</sup>, K<sup>+</sup>, and proline contents in different wild turfgrasses under salt stress](#)

Yuichi Tada, Ryuto Kochiya, Masayuki Toyozumi, Yuka Takano.....301  
日本各地から採集した20種の野生シバの系統解析、耐塩性の調査、含水率、K<sup>+</sup>、Na<sup>+</sup>、およびプロリン含量の測定を行った。すべての野生シバは塩生植物に分類され、塩ストレス下でもイネと比較して高い含水率を維持と高いK<sup>+</sup>/Na<sup>+</sup>比を維持した。ほとんどの野生シバでは塩ストレスにตอบสนองした多量のプロリン合成が観察された。これらの野生シバは、耐塩性機構の解明や耐塩性シバの育種に有用と考えられる。

#### [Development of an efficient \*Agrobacterium\*-mediated transformation method and its application in tryptophan pathway modification in \*Catharanthus roseus\*](#)

Hiroaki Kisaka, Dong Poh Chin, Tetsuya Miwa, Hiroto Hirano, Sato Uchiyama, Masahiro Mii, Mayu Iyo.....311  
本研究では、アグロバクテリウムを用いて効率的にニチニチソウへ形質転換する方法を確立し、この方法を用いてトリプトファン代謝系を強化する遺伝子群を導入した形質転換ニチニチソウを得た。これら形質転換植物の葉では、顕著なトリプトファン含量の増加、さらに、アルカロイドであるカタランチン等の増加が認められた。ニチニチソウに含まれる有用なアルカロイド成分を増加させるための技術として期待できる結果であった。

#### [Variety-dependent accumulation of glucomannan in the starchy endosperm and aleurone cell walls of rice grains and its possible genetic basis](#)

Ryszard Zamorski, Kei'ichi Baba, Takahiro Noda, Rimpei Sawada, Kana Miyata, Takao Itoh, Hanae Kaku, Naoto Shibuya.....321  
植物細胞壁は植物の生長・分化や食品素材としての利用に重要な役割を果たしているが、単一の植物種の間で細胞壁の構造がどの程度遺伝的に変異するかはよく分かっていない。著者らは様々な品種のイネ種子胚乳細胞壁の化学構造を比較した結果、これらの細胞壁がグルコマンナンを含有するものとしないうものに分離すること、酒米や食味が不良とされる品種でグルコマンナン含有細胞壁が多い傾向を見出した。代表的な品種のゲノム配列の比較から、こうした差異はイネ第9染色体上のOsCslA12遺伝子の変異による可能性が示唆された。

#### [Genome editing and molecular analyses of an \*Arabidopsis\* transcription factor, LATE FLOWERING](#)

Yoshimi Nakano, Maki Kawai, Moecca Arai, Sumire Fujiwara.....337  
花成抑制因子として知られるシロイヌナズナの転写因子LATE FLOWERING (LATE) の機能のさらなる理解を目的としてゲノム編集により機能欠損させたところ、明確な形質を示さず、LATEは他の因子と冗長的に機能することが示唆された。また、LATEは転写のコリプレッサーTOPLESS (TPL) や花芽運命決定因子CRABS CLAW (CRC) と転写抑制複合体を形成し、転写抑制因子として花芽運命決定において機能する可能性を示した。

#### [ADP-glucose pyrophosphorylase genes are differentially regulated in sugar-dependent or -independent manners in tomato \(\*Solanum lycopersicum\* L.\) fruit](#)

Yong-Gen Yin, Atsuko Sanuki, Yukihisa Goto, Nobuo Suzui, Naoki Kawachi, Chiaki Matsukura.....345  
トマト果実は未熟～緑熟期にデンプンを高蓄積するが、その間のデンプン生合成律速酵素AGPaseの発現制御については不明な点が多い。著者らは未熟期果実で高発現することが報告されているAGPase遺伝子AgpL1、AgpS1の転写制御様式を明らかにするため、半切果実を使用した実験系を用いて様々な代謝糖、非代謝性糖アナログ、ヘキソキナーゼ阻害剤およびプロリンに対する同遺伝子の転写応答を調査した。

### Short Communication

#### [MYB3R-mediated and cell cycle-dependent transcriptional regulation of a tobacco ortholog of SCARECROW-LIKE28 in synchronized cultures of BY-2 cells](#)

Keito Mineta, Junya Hirota, Kesuke Yamada, Takashi Itoh, Poyu Chen, Hidekazu Iwakawa, Hiroto Takatsuka, Yuji Nomoto, Masaki Ito.....353  
シロイヌナズナの細胞サイズ制御因子SCL28のタバコオルソログNtSCL28を同定した。同調培養が可能なBY-2細胞を用いて解析した結果、NtSCL28はMYB3RファミリーのNtmybA2による転写活性化を受けて、細胞周期のG2/M期に特異的に発現することが明らかになった。

日本植物バイオテクノロジー学会では、産業界・大学/国研・官公庁の連携を一層推進するために、産学官協力セミナーを年2回開催しております。第5回セミナー「ゲノム編集を農作物に試してみようーゲノム編集研究のデザインから野外での検証ー」は、ゲノム編集に関する話題について、Zoomハイブリッドにて開催しました。

ゲノム編集技術を活用したGABAトマトが北は北海道から南は沖縄まで、一般家庭でも栽培され販売されるようになりました。その一方で、ゲノム編集技術を農作物の品種改良研究に取り入れるには、どのようなプロセスを踏む必要があるのか、わかりかねている方々がまだまだ多いのが現状と思われまます。本セミナーでは、農作物を対象としたゲノム編集プロジェクトの成果を紹介するとともに、ゲノム編集技術の社会実装への道筋を示し、ゲノム編集作物の今後について議論しました。事前登録者が250名となる盛況なセミナーとなりました。

このセミナー内での講演の様子は動画として公開しています。興味のある方はご視聴ください。

<https://www.youtube.com/@officialjspb7893>

日時：2023年11月27日（月） 13:30～17:30 ハイブリッド開催

- 13:00-13:10 はじめに（産学官連携担当理事、奈良先端大：加藤 晃）
- 13:10-13:25 まずはおじめてみよう：ゲノム編集とはじめ（大阪大学：村中 俊哉）
- 13:25-13:50 ジャガイモでのターゲット遺伝子の発見から圃場試験までの道筋（大阪大学：安本 周平）
- 13:50-14:15 リンドウの研究からみえてきたことーゲノム編集技術への期待（福井県立大学：西原 昌宏）
- 14:15-15:00 コムギ、イネ、花卉、ダイズ、ダイコンなどの事例紹介（一部ビデオ）（ゲノム編集育種素材開発コンソーシアムのメンバー）
- 【休憩】
- 15:15-15:45 ゲノム編集知財をとりまく最新情報（セントクレスト国際特許事務所：橋本 一憲）
- 15:45-16:15 従来育種からゲノム編集作物育種を考えるー国民理解に向けた取り組みー（農研機構・生物研：吉田 均）
- 16:15-16:45 ゲノム編集作物への民間からの期待（玉川大学、元ヴィルモランみかど：酒井 隆子）
- 16:45-17:20 総合討論（コーディネーター、大阪公立大学：小泉 望）
- 17:20-17:30 学会からのお知らせ（産学官連携委員、大阪公立大学：小泉 望）

次回第6回産学官協力セミナーは、2024年6月頃の開催予定です。

産学官連携委員会 委員長  
加藤 晃（奈良先端大）

## 学生優秀発表賞に関するアンケート結果について

千葉大会で行った学生優秀発表賞の選考について、学生と審査員を対象にアンケートを行いました。以下に結果をご報告します。

男女共同参画・キャリア支援委員会  
委員長 三浦謙治（筑波大）

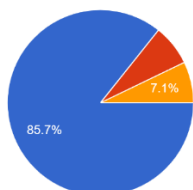
JSPB学生優秀発表賞に関するアンケート  
(アンケート総数：学生14名、審査員44名)

### 1. 学生優秀発表賞の是非について

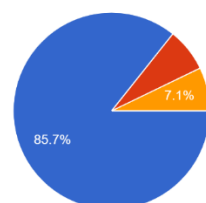
- ・概ね肯定的（学生：92.9%、審査員：79.5%）
- ・発表資料の質の向上、大会への参加や発表意欲の向上につながる。
- ・今回は座長にも審査をお願いしたが、審査員の負担が大きいとの意見が一定数あった。
- ・審査員の人数を増やす、審査に割り当てられた中から上位3名を選ぶといった意見有り。
- ・口頭発表でなくポスターセッションで実施する。口頭発表の学生も同じ内容をポスターで出すことでエントリー可能とする。
- ・審査結果の公表を迅速にし、会報だけでなく、学会HPや大会HPで広く広報を求める。

#### 学生回答

学生優秀発表賞が設置されてよかったですか  
14件の回答

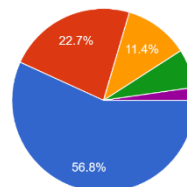


学生優秀発表賞を今後も続けてほしいですか  
14件の回答

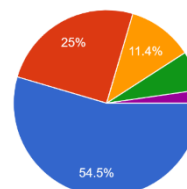


#### 審査員回答

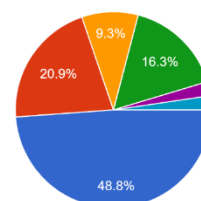
学生優秀発表賞が設置されてよかったですか？  
44件の回答



学生優秀発表賞の実施を継続したほうがよいと思いますか？  
44件の回答



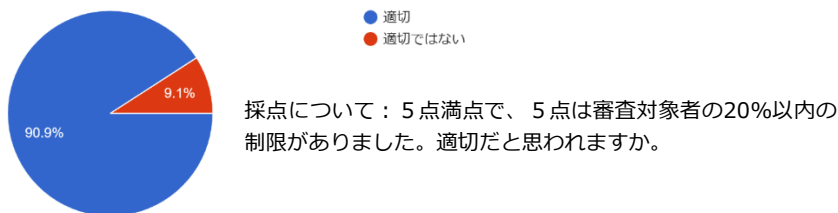
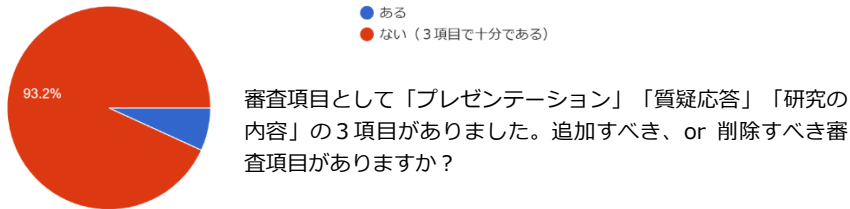
審査のために拘束された日数はどのくらいでしたか？  
43件の回答



学生優秀発表賞については概ね肯定的であるが、審査員の負担軽減については議論が必要

## 2. 審査項目、配点について

- ・概ね3項目（プレゼン・質疑応答・研究内容）の審査項目で問題ない。
- ・総合判定のみでもよい、シンプルに上位3名を選ぶとすれば、審査員の負担軽減にもなるのではという意見有。



## 3. オンラインでの発表者も審査対象としても可能か、オンラインでも審査を引き受けるか

- ・学生回答：
  - オンラインでの発表も審査対象可（57.1%）
  - 対面での発表のみを審査対象（42.9%）
- ・審査員回答：
  - 学生発表者がオンラインでの口頭発表でも審査対象可（56.8%）
  - 対面での学生発表者のみを審査対象（38.6%）
  - オンライン参加の審査員も審査を引き受けることが可能（50%）
  - 審査員は対面参加の場合のみ審査を引き受けることが可能（20.5%）

### 意見：

- ・プレゼンテーション能力向上を効果的に行うには対面での発表を審査対象とすべき。
- ・遠方で旅費捻出困難な学生にも機会を与えるため、オンラインでの発表も可とする。
- ・対面とオンラインの比較が難しいので、分けするか、基準が同じになるような措置が必要。
- ・学生にとって学会の雰囲気味わうのは大きな意味があるので、対面での発表が良い。

## 4. その他

- ・ポスターセッションの時間に余裕をもたせて、ポスター賞とする。
- ・審査員の数を増やす（若手、ポスドクも審査員とする）。
- ・大会によっては一般講演とシンポジウムが並行して開催されるので、シンポジウムが聞けなくなる心配がある。

## 根本 圭一郎 先生ご略歴

- 2004年 東海大学 開発工学部 生物工学科 卒業
- 2006年 東海大学大学院 開発工学研究科 修士課程 修了
- 2009年 東海大学連合大学院 生物化学研究科 博士課程 修了
- 2009年 九州大学大学院薬学研究院 学術研究員
- 2010年 愛媛大学 特定研究員
- 2017年 公益財団法人 岩手生物工学研究センター 園芸資源研究部 主任研究員



写真1：リンドウを育成する植物培養室にて

## 【奨励賞】

根本 圭一郎 先生 公益財団法人 岩手生物工学研究センター 園芸資源研究部 主任研究員

「無細胞翻訳系を基盤とした生化学的アプローチによる植物生理学・生態学的研究」

## 1. 本受賞内容について簡単にご説明いただけますでしょうか

生物は10万種を超えるタンパク質を持っていると考えられていますが、それらの性質は千差万別であり、また、不安定であるために機能を明らかにするのは容易ではありません。私たちは、試験管内でタンパク質を合成する特殊な技術“コムギ無細胞翻訳系”を用い、植物の様々な生命現象に関わるタンパク質、特に、細胞内シグナル伝達系に注目して研究を行ってきました。

タンパク質のリン酸化は主要な細胞内情報伝達系の1つであり、ほぼすべての生命現象の制御に関わっていると考えられています。タンパク質のリン酸化はプロテインキナーゼによって触媒され、ゲノム解析から、植物にはヒトの3倍以上のプロテインキナーゼ遺伝子が存在することが明らかになっています。しかしながら、機能が明らかになっている植物プロテインキナーゼはほんの一握りであり、大半のプロテインキナーゼの生化学的特性や機能はほとんど明らかにされていませんでした。そこで、コムギ無細胞系を基盤とした技術により、750種以上からなるシロイヌナズナのプロテインキナーゼライブラリーを構築し、さらに、網羅的な生化学的機能解析技術などを開発することで、それらの生化学的特性を明らかにしました。さらに、本技術は、これまで植物では実体がほとんど明らかにされていなかった、チロシンリン酸化プロテインキナーゼや水チャネル・アクアポリンの活性化に必要な責任プロテインキナーゼ、植物-病原菌や虫などとの相互作用に関係する受容体様プロテインキナーゼの発見などに繋がりました。特に、アクアポリンの活性化機構は、花の開花運動において重要な役割を果たしていることが明らかになり、生殖器官としての花が開花に至る分子機構を理解するための重要な知見となることが期待できます。

また、最近では、植物ホルモン・アブシジン酸やジベレリンの受容体を中心としたシグナル関連因子の高感度な機能解析技術を開発しました。さらに、本技術を活用し、特定の受容体を活性化することができる選択的な受容体アゴニスト化合物の開発にも成功しています。本法は、シンプルなタンパク質間相互作用に基づいているため、標的とする農作物の遺伝子情報さえ取得できればどのような農作物にも即適用可能であり、さらに、理論上、標的農作物に最適化したアゴニスト・アンタゴニスト化合物の開発が可能であることなどから、植物成長調整剤を開発するための有用なスキームの1つになることが期待されます。

## 2. 本受賞内容のご研究に取り組もうとされたきっかけはなんでしょう

愛媛大学でのポスドク時代にコムギ胚芽無細胞翻訳システムに出会ったことがきっかけになります。それまで、大腸菌や酵母を使った生細胞系によるタンパク質合成の経験はありましたが、タンパク質の研究は大変な労力と時間がかかるものだと思っていました。一方、無細胞翻訳システムは、試験管内でタンパク質を合成する技術ですが、一回の実験で複数種類のタンパク質を同時に合成でき、さらに、その作業はPCRと然程変わらない簡便さであることに驚きました。本技術のメリットを活かすことで、これまで困難であった生化学的アプローチによる網羅的な解析が可能になると考え研究を開始しました。

## 3. 本受賞内容は何年くらいの成果の積み重ねでしょう

コムギ胚芽無細胞翻訳システムを用いた研究は2010年に愛媛大学でポスドクとして着任してからですので、およそ13年になります。最初プロテインキナーゼに関する研究を開始し、その後、2015年頃からアブシジン酸やジベレリン受容体の研究を開始しました。2017年に現在所属である岩手生物工学研究センターに移動してからは園芸作物リンドウの花のアクアポリン研究を開始しました。

#### 4. 本受賞内容と「植物バイオテクノロジー」とのかかわりはどのようにご説明できますでしょうか

生化学的解析を中心とした研究は、多くの場合、見出した現象が生体内で機能することを証明する必要があります。そのため、これまでに、植物バイオテクノロジー技術を使用し、タバコやシロイヌナズナなどの植物体や培養細胞、非モデル植物リンドウなどを対象にし、注目する因子の機能を逆遺伝学的アプローチによって解析してきました。また、生化学研究はタンパク質の機能を分子レベルで解析するため、酵素活性やタンパク質間相互作用に必要な領域をアミノ酸レベルで特定することができます。したがって、生化学的情報とゲノム編集などを組み合わせることで、物質生産性を高めた植物や、ストレスシグナル伝達強度を改変して環境ストレスに強い新たな植物の開発などの新たな植物バイオテクノロジー技術の創出に貢献できるものと考えます。

#### 5. 本受賞に際して感謝したい人はいますか

これまでに関わった先生方、スタッフ、学生など多くの方々に感謝いたします。特に、愛媛大学のポスドク時代にお世話になった澤崎達也先生には、コムギ胚芽無細胞翻訳システムのノウハウを伝授いただき、また、研究を多角的にサポートして頂きました。現在も、良きアドバイザーとして大変お世話になっています。また、西原昌宏先生には、長年培ってきたリンドウ研究のプラットフォームを惜しみなく提供して頂きました。西原先生は最近、長年勤めた岩手生物工学研究センターから福井県立大学へ移動されましたが、新しい環境でもご活躍されることを祈っております。

#### 6. 本受賞内容にまつわる裏話的なエピソード、思い出深いエピソードはありますか

リン酸化部位を推定する際に、標的アミノ酸を別のアミノ酸に置換する手法がよく使われます。植物チロシンプロテインキナーゼの研究を開始したころ、チロシンリン酸化部位として推定した箇所を、何も考えずにアラニンに置換した変異体タンパク質をデザインしました。変異導入することで、見事にチロシンリン酸化レベルが低下し、さらに、タンパク質の機能が消失する結果が得られ、「チロシンリン酸化によってタンパク質の機能が制御されている」と興奮しました。しかしながら、実際には、リン酸化による影響ではなく、アラニン置換することでタンパク構造が変化しただけであったことが後に判明しました。機能性ドメインでなくとも1アミノ酸を置換するだけでタンパク質に大きな影響を及ぼす可能性があることがわかり、タンパク質研究の恐ろしさを体感したよい経験です。おかげで、2年分のデータがお蔵入りになり目の前が真っ暗になりましたが、必死にリカバリーした結果が今回の受賞に繋がったかと思うと考え深いものがあります。

#### 7. 先生にとって、日本植物バイオテクノロジー学会はどのような存在でしょうか

大学院生の時に、2006年第24回日本植物細胞分子生物学会大会に初めて参加し、以降、様々な形で学会に参加させていただいています。近年では学会の規模が大きくなる傾向にあり、学会中に深い議論をする機会やコミュニティを構築する機会が減ってきているように思いますが、本学会は研究者や学生同士の距離が近く活発な議論が行われている印象です。私自身、西原先生と初めてお会いしたのは本学会のポスター会場で、その時のご縁もあって岩手生物工学研究センターに勤めることになりました。また、本学会の前進である日本植物組織培養学会の発足が1981年で、私と同年代であることから深いご縁を強く感じる学会です。

#### 8. 研究生活に関して座右の銘、ポリシーや心がけていることなどはございますか

遊びの実験を大切にします。先行研究などを鵜呑みにしていると、それでは見えない面白い現象を見落とす可能性があるので、論理的な根拠があやふやでも閃いたら、直ぐやるを心がけています。そのような無駄撃ちな実験データを大量にストックし、自分が見ている現象の本質を探ります。このスタイルは無駄データが量産されますが、研究の深みが増し、後々何らかの役に立つことも多いと思います。

#### 9. 後に続く本学会の若手・中堅研究者にアドバイス、メッセージをお願いします

自身の研究にのみ集中すると視野が狭くなる傾向にあるので、なるべく他方面の研究者と交流を図ることをお勧めします。私は研究分野にこだわりがないため農学や動物、工学、薬学系の研究者とも交流がありますが、そのおかげで、研究の幅が広がったように思います。また、最近では、大きなグループを形成する研究スタイルが主流になっていますが、1つでも突飛した技術や能力を持ち合わせている人材が重宝されるように思います。私も中堅研究者ゾーンに入ったばかりですが、卓越した技術や能力を磨き、共に荒波に負けないように頑張っていければと思います。



写真2：西原先生の離任式後にラボメンバーと集合写真



学会賞授賞式にて

## 第41回以降の大会について

### 第41回（仙台）大会

大会実行委員長：中山 亨(東北大学)

会期：2024年8月29日(木)～

9月1日(日)

会場：東北大学川内北キャンパス

(ハイブリッド開催)

開催日程（予定）：

8/29（木）午後 代議員総会

8/30（金） 大会1日目

8/31（土） 大会2日目

9/1（日） 大会3日目

9/1（日） 午後 市民公開シンポ

ジウム

第42回大会は、水谷正治先生(神戸大学)を大会実行委員長として神戸大学で開催される予定です。

日本植物バイオテクノロジー学会（JSPB）では、国際化推進および若手研究者の海外経験の奨励を目的として、2024年度（学会会計年度、2024年7月1日から2025年6月末まで）に開かれる植物バイオテクノロジーに関連する海外国際会議へ参加発表する会員への渡航滞在費用をサポートします。

希望者は下記応募要項を参照の上、[様式A-2024](#)を記入しPDF化したものを2024年4月30日火曜日までに [jspb-post@as.bunken.co.jp](mailto:jspb-post@as.bunken.co.jp)へ提出してください。その際、メールの件名を「2024JSPB国際会議参加奨励金応募」としてください。

- ・採択人数：1-2名程度
- ・補助金額：上限20万円（一人あたり）
- ・条件： JSPB会員（2023年度と2024年度の会員であること）  
帰国後に1,500字程度の参加報告書を執筆（原稿はJSPB会報に掲載予定）  
植物バイオテクノロジーに関連する海外国際会議での発表（企業に所属する会員の場合は必須ではない）  
重複受給は不可であり、採択後に確認する。
- ・応募締切：2024年4月30日火曜日
- ・決定時期：2024年6月中
- ・応募書類と提出先：[JSPB学会HP](#)から様式A-2024をダウンロード、記入の上、様式をPDF化したものを [jspb-post@as.bunken.co.jp](mailto:jspb-post@as.bunken.co.jp)へ提出
- ・選考：会長、会長代理、幹事長、国際化委員4名（合計7名）の合議選定推薦後、理事会で決定。
- ・選考方針：大学院学生～学位取得後8年くらいまでの若手を優遇するが、ライフイベントについても考慮する（該当者は応募書類にその旨を記載のこと）。植物バイオテクノロジーに関連する国際会議での参加・発表であること、JSPB学会会員歴、参加歴、CV、発表内容や意欲、応募理由について総合的に判断する。

国際化委員会 委員長  
有村 慎一（東大）

## 学会からのお知らせ

### ◆ 2024-2025年度会長候補者選挙結果のお知らせ

学会選挙規定に則り、2024-2025年度会長候補者の選挙を10～11月に行いました。その結果、矢崎一史会員が会長候補者に選出され、直ちに理事（会長代理）に就任しました。これに伴い、小泉望会員は理事（会長代理）から理事になりました。

### ◆ Plant Biotechnology誌からのお知らせ

Plant Biotechnology誌の日本人のエディターは、全員本学会の会員です。論文投稿を考えている時、あるいは投稿前に、各エディターに直接コンタクトをとって編集担当等について相談して頂いて結構です。様々な事情で短時間での審査が必要な時、できる限り対応しますので、遠慮なくエディターや編集委員長にご連絡ください。

### ◆ クリムゾンインタラクティブ（エナゴ）より論文コーチング動画の提供

特別賛助会員クリムゾンインタラクティブ（エナゴ）様より、本学会員用に国際ジャーナル編集長によるコーチング動画をご提供頂いています。ページのレイアウトの刷新にともない、動画数を18本に増やしたとのこと。国際ジャーナルの編集長や主任研究員が論文執筆や投稿に役立つヒントを5～10分の動画で紹介していますので、ご活用ください。

#AskEnago ジャーナル編集長・主任研究員の論文コーチング動画

<https://www.enago.jp/videos/partners/jspb>

編集委員は以下のサイトに載っています。

<https://www.jspb.jp/journal/sub08/>



本会の運営にご協力賜り感謝申し上げます。

- ◆ [\(株\) カネカ](#)
- ◆ [キリンホールディングス \(株\)](#)
- ◆ [クミアイ化学工業 \(株\) 生物科学研究所](#)
- ◆ [グランドグリーン \(株\)](#)
- ◆ [クリムゾンインタラクティブ 英文校正・校閲-エナゴ](#)
- ◆ [コルテバ・アグリサイエンス日本 \(株\)](#)
- ◆ [三栄源エフ・エフ・アイ \(株\)](#)
- ◆ [サントリーグローバルイノベーションセンター \(株\) 研究部](#)
- ◆ [シンジェンタ ジャパン \(株\)](#)
- ◆ [住友化学 \(株\) 健康・農業関連事業研究所](#)
- ◆ [\(株\) 日本医化器械製作所](#)
- ◆ [バイエル クロップサイエンス \(株\)](#)
- ◆ [北海道三井化学 \(株\) ライフサイエンスセンター](#)
- ◆ [\(株\) UniBio](#)

## 日本植物バイオテクノロジー学会

〒162-0801  
東京都新宿区山吹町358-5  
(株)国際文献社内  
TEL: 03-6824-9378  
FAX: 03-5227-8631  
[jspb-post@as.bunken.co.jp](mailto:jspb-post@as.bunken.co.jp)  
ホームページ:  
<https://www.jspb.jp/>

## 2022-2023年度役員

### 理事

会長

吉田 薫 (東大)

会長代理

矢崎 一史 (京大)

幹事長

平井 優美 (理研)

編集委員長

梅田 正明 (奈良先端大)

会計幹事

吉松 嘉代 (医薬健栄研)

広報担当

岩瀬 哲 (理研)

産学官連携担当

加藤 晃 (奈良先端大)

国際化担当

有村 慎一 (東大)

男女共同参画・キャリア支援担当

三浦 謙治 (筑波大)

庶務担当

榊原 圭子 (理研)

理事

小泉 望 (大阪公立大)

監事

光田 展隆 (産総研)

## 編集後記

学生優秀発表賞は概ね肯定的に受け止めて頂いているというアンケート結果でしたが、より良いものになるよう、理事会として検討を続けて参ります。アンケートにご協力、ご意見を下さった皆様、ありがとうございました。

(担当: 幹事長 平井 優美 [理研・環境資源科学研究センター])  
E-mail: [masami.hirai@riken.jp](mailto:masami.hirai@riken.jp)